

鹿児島県総合教育センター
平成30年度長期研修研究報告書

研究主題

社会生活につながる学びの実現を目指した
国語科学習指導の在り方
— 「学び合いを支える対話活動」を通して—

肝付町立内之浦中学校
教諭 上東 唯

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	2
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題に関する実態分析と考察	
(1)	生徒に対する実態調査等の結果と分析	2
(2)	教員に対する実態調査等の結果と分析	4
(3)	調査結果等を基にした本研究の方向性と授業づくりの視点	5
2	研究主題についての基本的な考え方	
(1)	社会生活につながる学びについて	5
(2)	「学び合いを支える対話活動」について	5
3	社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の在り方	
(1)	国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導計画の工夫	6
(2)	「学び合いを支える対話活動」における指導の在り方の明確化	8
4	検証授業Ⅰの実際と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	12
(2)	検証授業Ⅰの指導の工夫と考察	15
(3)	検証授業Ⅰにおける生徒の表現例	19
(4)	検証授業Ⅰの成果と課題	20
(5)	検証授業Ⅰの課題を踏まえた指導法の改善	20
5	検証授業Ⅱの実際と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	20
(2)	検証授業Ⅱの指導の工夫と考察	23
(3)	検証授業Ⅱにおける生徒の表現例	26
(4)	検証授業Ⅱの成果と課題	26
(5)	検証授業Ⅱ後の生徒の意識調査の結果	26
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	27
2	今後の課題	27

※ 参考文献

I 研究主題設定の理由

今日は、急速に進むグローバル化や情報化により、価値観が多様化していく時代になりつつある。このような変化の激しい時代を生きていくためには、社会生活の中で直面する課題について自ら考え判断し、解決していくことが必要となる。改訂された中学校学習指導要領の前文において、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」が示された。これを実現するために、国語科においては、子供たちが言葉によって自分の考えを明確に認識・表現しながら、互いのよさを生かして他者と協働し、課題解決に取り組めるようにすることが大切だと考える。

国語科の課題については、平成28年12月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において、主に三つのことが指摘されている。それは、「伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること」、「複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること」、「文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価すること」である。これらの課題を解決するために、これまで本校国語科では、他者を意識した表現活動の充実や、語彙力の向上を図った辞典や資料の日常的な活用、相互評価の在り方の明確化などの取組を継続して行ってきた。しかし、国語科で学んだ読み方や話し合いの方法、表現の仕方などを、他教科の学習を含む生活の場面で活用できていない現状がある。その要因の一つは、国語科の学びを活用できる場面を具体的に考え、その学びを活用した学習活動を設定することが十分ではなかったことにあると推測できる。

そこで、本研究では、社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導に取り組むことにした。この社会生活につながる学びを、他の単元の学習や他教科の学習、さらに、日常生活を含む社会生活（以下、社会生活の様々な場面）で活用できる学びと捉える。そして、国語科学習を通して得た学びを活用できるようにするためには、国語科の学びと社会生活の様々な場面をつなぎ、学びをどのように活用できるのか具体的に考える学習活動が必要だと考える。なぜなら、授業を通して「何を、どのように学び、何ができるようになったか」、「学びを生かして何ができるか」を明確に認識できれば、生徒は国語科の学びの意義や価値を実感し、授業で身に付けた力を他の場面で発揮するようになると考えたからである。このような学習活動の大きなポイントは、学びを自覚し、一般化することである。学びを自覚し、一般化することとは、授業を通して習得した知識と技能、身に付けた指導事項とその理解を支える学び方を明確に認識し、それらを次の学習や他の場面でどのように生かせるのかを考え、自分の言葉で表現することであると考えられる。学びを自覚し、一般化するためには、まず、単元の導入で「何を、どのように学び、何ができるようになるか」、「学んだことをどのように生かせようか」ということを考えさせ、生徒が学びを自覚し、一般化するための学習の見通しをもてるようにする。次に、国語科の学習過程の中でも、特に「考えの形成」、「共有」の過程に「学び合いを支える対話活動」を位置付けることにした。この「学び合いを支える対話活動」とは、生徒一人一人が効果的に助言し合い、自他ともに高め合いながら、学びを獲得していく対話活動のことである。「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付けることで、生徒は他者からの助言を通して、自他の考えを明確にするとともに、自分の変容を具体的に認識することができる。学習過程に位置付けた「学び合いを支える対話活動」を通して、単元の終末で学びを自覚し、一般化することは、単なる内容理解に止まらない、国語科で育成を目指す、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を身に付けることにつながる。このように、国語科学習を通して得た学びを、自覚、一般化するプロセスを経て、既習事項と関連付け、社会生活の様々な場面で活用できる資質・能力にすることを、学びの概念化と捉える。学びの概念化を図り、社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導に取り組むことは、改訂された学習指導要領が示す「学びに向かう力・人間性等」の育成につながると考える。

以上のことから、国語科の学習指導において、「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付け、国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導を工夫すれば、生徒が学びを概念化

し、社会生活につながる学びを実現できると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の構想

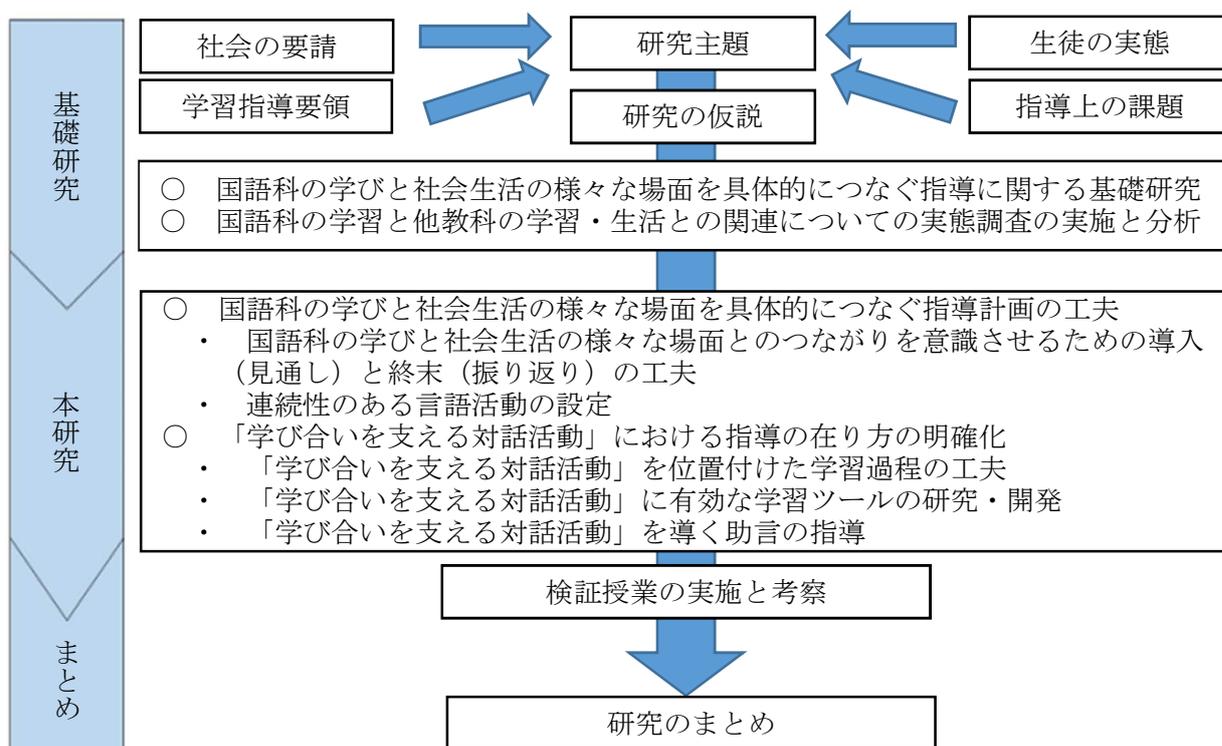
1 研究のねらい

- (1) 国語科の学習と他教科の学習・生活との関連について、生徒や教師の意識を調査し、社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の方向性を明らかにする。
- (2) 国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導を研究し、その具体的な指導の方法を明らかにする。
- (3) 「学び合いを支える対話活動」における指導の在り方を明らかにする。
- (4) 検証授業を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

国語科の学習指導において、「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付け、国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導を工夫すれば、生徒が学びを概念化し、社会生活につながる学びを実現できるのではないかと。

3 研究の計画



III 研究の実際

1 研究主題に関する実態分析と考察

- (1) 生徒に対する実態調査等の結果と分析

ア 実態把握の概要

社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の方向性を明らかにするために、「国語科の学習に関する意識」、「国語科の学習と他教科の学習・生活との関連に関する意識及び実態」の2項目について生徒の実態を把握し、分析することにした。なお、本校は全校生徒32人の小規模校であるため、より客観的なデータをとるために、生徒の実態調査(アンケート)の対象を肝付町内5中学校の全学年352人とした。

イ 実態調査等の実施方法

調査等の名称	実施の時期	調査等の対象
平成30年度全国学力・学習状況調査	平成30年 4 月	肝付町立内之浦中学校 第3学年(16人)
生徒の実態調査 (アンケート)	平成30年 6 月	肝付町内 5 中学校 全学年(352人)

ウ 国語科の学習に関する実態調査の結果

「国語科の学習は大切だと思うか」という問いでは、約8割の生徒が「大切だと思う」と答えている。その理由として最も多かった意見は、「将来大切になると思うから」、「漢字を普段からよく使うから」というものであった。一方、「国語科の学習に積極的に取り組んでいる」と答えた生徒や、「国語科の授業を通して『学んでよかった』と思うときがある」と答えた生徒は、約4割であった。「学んで

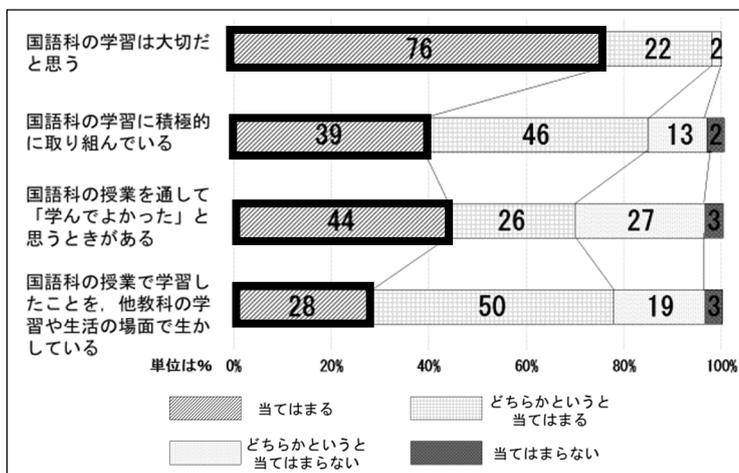


図1 国語科の学習に関する実態調査の結果

よかった」と思うときとして多く挙げられた場面は、「難しい漢字が使われている文章を読めたとき」、「作文を書けたとき」などで、漢字の知識を活用できたときが多いことが分かった。

また、「国語科の授業で学習したことを、他教科の学習や生活の場面で生かしているか」という問いに対して、「生かしている」と答えた生徒は約3割にとどまっている。「国語科の学習は大切だと思う」と回答した生徒の割合との差に注目すると、国語科の学習に重要性を感じている生徒の割合に対して、「学んでよかった」、「他教科の学習や生活の場面で生かしている」という意識をもつ生徒の割合は低くなっていることが分かる(図1)。

さらに、国語科の学習と他教科の学習・生活との関連についての実態を詳しく調査するために、本校における平成30年度全国学力・学習状況調査【数学B：主として活用】(第3学年)の結果を分析した。すると、表1に示す問題の正答率が低いことが分かった。

表1 平成30年度全国学力・学習状況調査 問題別調査結果【数学B：主として活用】から

問題番号	問題の概要	問題の趣旨
3 (3)	A駅から道のりが6kmの地点において、列車Aが通ってから列車Bが通るまでの時間をグラフから求める方法を説明する	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる
5 (2)	通常料金をaとしたときの団体料金の10人分が通常料金の何人分に当たるかを求める計算から分かることを選び、その理由を説明する	里奈さんの計算を解釈し、数学的な表現を用いて説明することができる

どちらも、文章から必要な情報を読み取り、適切な立式や記述、説明をすることが必要な問題である。また、これらの問題については、県の正答率、全国の正答率でも同様に低い結果が出ている。

問題番号	本校の正答率 (%)	県の正答率 (%)	全国の正答率 (%)
3 (3)	12.5	11.3	13.2
5 (2)	18.8	7.9	10.4

このことから、本校だけではなく、県、そして全国でも、問題から必要な情報を的確に読み取ることや、他者に解き方や考え方を説明することに課題があるといえる。

エ 考察

実態調査等の結果から、多くの生徒が国語科の学習に重要性を感じてはいるものの、「学んでよかった」、「他教科の学習や生活の場面で生かしている」という実感を覚える生徒の割合があまり高くはないことが分かる。全国学力・学習状況調査の結果に表れているように、文章から必要な情報を読み取ることや、的確な記述・説明をすることなど、国語科が中心的な役割を担って育成する言語能力が、十分に身に付いていないことも明らかになった。

(2) 教員に対する実態調査等の結果と分析

ア 実態調査の概要

社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の方向性を明らかにするために、肝付町内5校の中学校教員を対象に実態調査を行った。調査内容に、「担当の教科と他教科等の学習との関連に関する意識」、「担当の教科の学習内容と国語科の学習内容との関連に関する意識及び実態」の2項目を設け、その結果を分析して明らかになった課題について述べる。

イ 実態調査等の実施方法

調査等の名称	実施の時期	調査等の対象
教員の実態調査(アンケート)	平成30年6月	肝付町内5中学校教員(45人回答)

ウ 担当の教科と他教科等の学習との関連に関する実態調査の結果

実態調査の結果から、約7割の教員が、「担当の教科と他教科の授業で生徒が学習していることには、関連した学習がある」と感じていることが分かる。一方、「担当の教科以外の教科で、生徒がどのような学習をしているか知っている」と答えた教員は約1割にとどまっている(図2)。

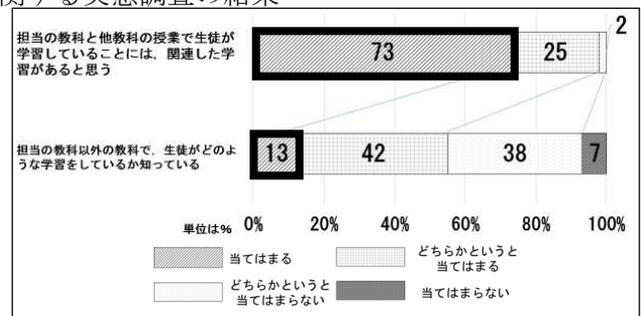


図2 担当の教科と他教科等の学習との関連に関する実態調査の結果

エ 担当の教科の学習内容と国語科の学習内容との関連に関する実態調査の結果

国語科の学習と他教科の学習・生活との関連について、国語科以外の教科を担当する教員を対象に実態調査を行った。

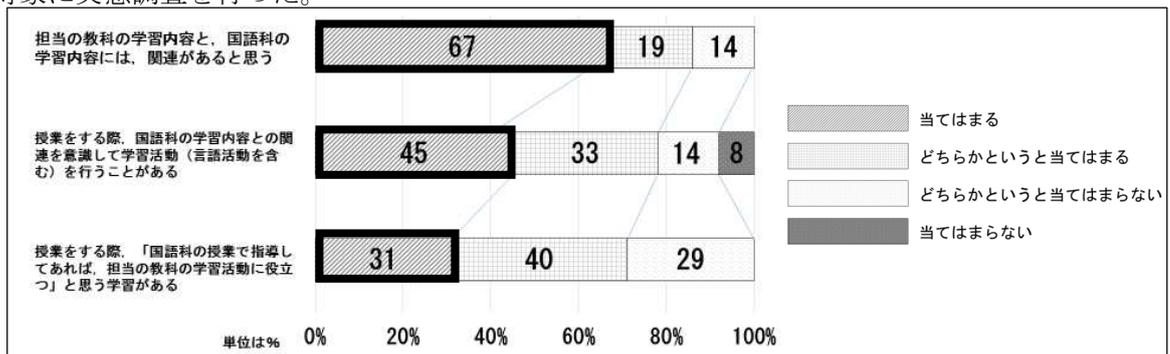


図3 担当の教科の学習内容と国語科の学習内容との関連に関する実態調査の結果

すると、約7割の教員が「担当の教科の学習内容と、国語科の学習内容には、関連がある」と考えているが、授業をする際に国語科の学習内容との関連を意識して学習活動(言語活動を含む)を行っている教員は5割に満たなかった(図3)。

また、全ての教科の担当教員から、担当の教科と国語科には、「文章を読み取ること」、「自分の考えを表現すること」という学習内容で関連があるという回答が得られた。「授業をする際、『国語科の学習内容で、担当の教科の学習活動に役立つ』と思う学習があるか」という質問には、約7割の教員が肯定的に回答している。担当の教科の学習活動に役立つと思う学習を選択した結果は、表2のとおりである。大半の教員が、いずれの学習も「担当の教科の学習活動に役立つ」と思っていることが分かる。

表2 「国語科の学習内容で、担当の教科の学習活動に役立つ」と思う学習（複数回答可・25人回答）

「担当の教科の学習活動に役立つ」と思う国語科の学習	(人)
話合いの方法や、調べたことを分かりやすく伝え合うことに関する学習	21
教科書や問題文を読んで、その内容を正しく理解することに関する学習	18
レポートなどの文章を書くことに関する学習	17
担当の教科で使われている漢字や語句の知識に関する学習	15
その他（※ 主に英語科から、文法に関する学習が挙げられた。）	4

(3) 調査結果等を基にした本研究の方向性と授業づくりの視点

生徒の実態調査等の結果から、将来の生活に限らず、現在の生活の中でも、他教科の学習を含む様々な場面で、国語科の学習が生かされていると生徒に意識させることが、国語科の学びの意義や実感に必要であると考えられる。

教員の実態調査の結果から読み取れるように、国語科の学習は、他の教科等の学習と関連が深い。このことから、国語科で学んだ読み方や話合いの方法、表現の仕方などを、他教科の学習でどのように生かせるのかを具体的に考え、その学びを活用した学習活動を設定することが必要であり、大切であると考えられる。

以上のことから、本研究では、国語科の指導計画及び学習過程を見直し、生徒が「何を、どのように学び、何ができるようになったか」を単元の終末（振り返り）で自覚し、国語科学習指導で得た学びを社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを考えることを通して、国語科の学びの意義や価値を実感することができる授業を目指して、研究を進めていきたいと考えた。

2 研究主題についての基本的な考え方

(1) 社会生活につながる学びについて

本研究では、社会生活につながる学びを、社会生活の様々な場面で活用できる学びと捉える。改訂された中学校学習指導要領において、国語科で育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。同解説国語編の中で、「日常生活から社会生活へと活動の場を広げる中学生が、社会生活において必要な国語の特質について理解し、それを適切に使うことができるようにすること（知識及び技能）」、「社会生活における人と人との関わりの中で、思いや考えを伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うこと（思考力、判断力、表現力等）」が示された。この「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を、社会生活の様々な場面で生かせるように育成することが求められている。このような力を育成するために、単元の導入（見通し）と終末（振り返り）の場面で、「何を、どのように学び、何ができるようになるか（なったか）」、「学びをどのように生かせるか」を考え、学びを自覚し、一般化することができるようにする。このようなプロセスを経て、国語科学習を通して得た学びを、既習事項と関連付け、社会生活の様々な場面で活用できるようにし、学びの概念化を図る（図4）。



図4 学びの概念化のイメージ

(2) 「学び合いを支える対話活動」について

本校では、各教科の授業で、生徒同士が課題解決に向けて「教え合う」活動を積極的に取り入れている。学習リーダーがグループ内の支援を必要とする人に考え方や解き方を教えて回り、グループの全員が課題を解決できるようにする活動である。生徒同士が疑問に思ったところを分かるまで質問したり、他者に説明することで理解を深めたりすることができる一方、常に教えても

らう側で受動的な学びしか得られない生徒もいる。また、学校全体で取り組んできた授業改善の実践における課題として、次の三つが挙げられた。

- 1 多様な意見が出るよう、生徒のものの見方・考え方を広げるためにはどのような指導の工夫が必要か。
- 2 その場で考えて話すことが苦手な生徒への支援を、どうすればよいか。
- 3 他者から得た情報を自分なりに解釈し、活用する力を付けるにはどうすればよいか。

上記の本校生徒の実態についてこれまでの指導を振り返ると、国語科の学習過程における「自分の考えの形成」、「共有」、「自分の考えの再形成」の過程における指導が不十分だったと考える。形成した考えを他者と共有する意図や方法を明確にしていなかったことや、考えを広げ合う姿、考えを深め合う姿とはどのような姿であるかを、生徒に示していなかったことが課題として挙げられる（図5）。



図5 考えを共有することの意図や方法を理解していない状態

そこで、本研究においては、生徒一人一人が効果的に助言し合い、自他ともに高め合いながら学びを獲得していく対話活動を重視し、これを「学び合いを支える対話活動」と捉える。具体的には、助言を通して目指す姿（図6）を明確に示し、考えを広げ合う姿、考えを深め合う姿とはどのような姿であるかを生徒に理解させるとともに、学習ツールを活用して、思考の過程や、話し合った内容を整理・可視化することで、考えの形成、共有、考えの再形成ができるようにする。このような学習活動を通して生徒は自分の考えの変容を自覚し（図7）、学びを一般化することができると思う。

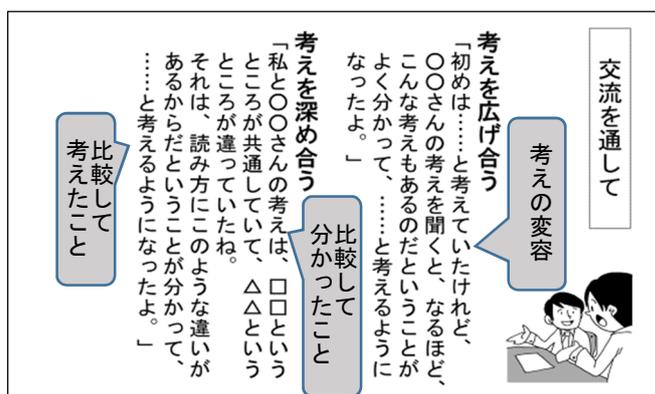


図6 助言を通して目指す姿



図7 考えを共有する意図や方法を理解し、自分の考えの変容を自覚している状態

3 社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の在り方

(1) 国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導計画の工夫

ア 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための導入（見通し）と終末（振り返り）の工夫

これまでの授業を振り返ると、単元の学習を次の単元の学習や他教科の学習とつなげることが不十分であった。校内で作成した年間指導計画には、他教科の学習や学校行事等との関連を明記しているが、国語科の授業で学習したことを他教科の学習や学校行事等でどのように生かせるのかを考えさせる指導を行うまでには至っていなかった。そのため、生徒は単元の終末（振り返り）で「学習を通して何が分かったのか」、「前の自分よりも何がどのくらいできるようになったか」、「学習を生かして何ができるのか」ということを自覚することが十分にできていなかったと考えられる。

そこで、単元の指導計画を構想する際、表3のように単元の導入（見通し）と終末（振り返り）を工夫し、国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを具体的に意識させることにした。

表3 国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐための指導計画の工夫

過程	学習活動（指導上の工夫）
単元の導入（見通し）	生活経験や既習事項と関連付けながら、単元の学習のねらいと流れをつかむことができるようにする。
単元の終末（振り返り）	単元の学習のできるようになったことを生徒の言葉で表現させ、授業で得た学びを社会生活の様々な場面でどのように生かせるのか考えることができるようにする。

イ 連続性のある言語活動の設定

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の留意点の一つに、「各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること」が示された。また、同解説国語編の中で、「言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する」とされている。

本研究では、国語科の授業における言語活動の質を向上させることについて、学びの意義や価値を実感させるために、連続性のある言語活動を設定することにした。そうすれば、前単元までの既習事項や、学校行事などの教育活動を通して身に付けた力を活用して新たな課題に取り組むことで、生徒が「前よりもっとできそうだ」、「前よりこんなことができるようになりそうだ」という学びの高まり・深まりを実感できると考えたからである。そこで、連続性のある言語活動を、例えば図8のように設定し、単元の構想を練ることにした。

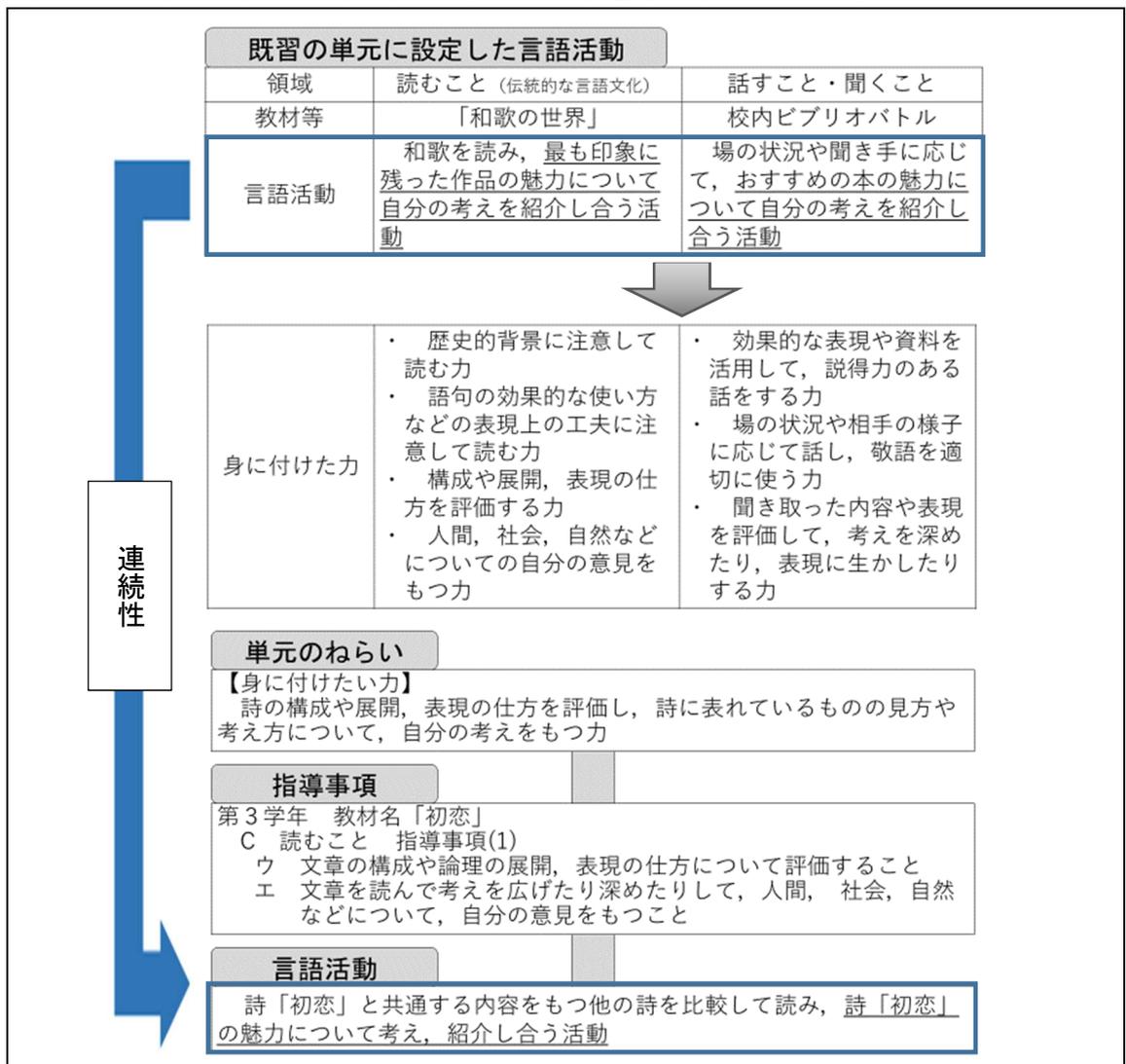


図8 連続性のある言語活動の設定

(2) 「学び合いを支える対話活動」における指導の在り方の明確化

ア 「学び合いを支える対話活動」を位置付けた学習過程の工夫

本研究では、学びを自覚し、一般化するための授業改善として、「学び合いを支える対話活動」を位置付けた学習過程を、図9のように設定した。

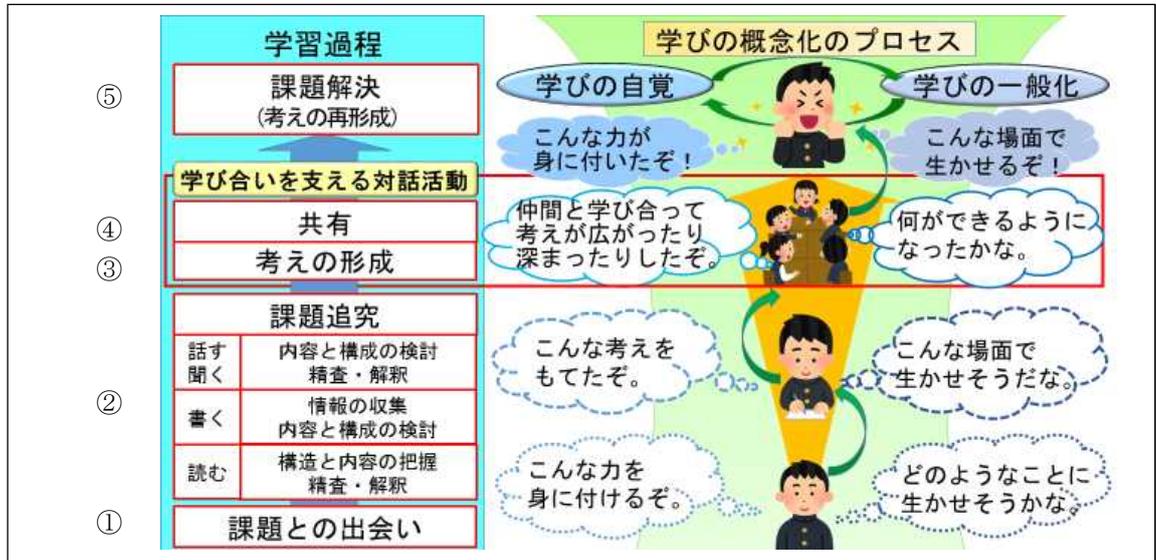


図9 「学び合いを支える対話活動」を位置付けた学習過程

①から⑤の各学習過程における、学習活動のねらいと内容は表4のとおりである。

表4 各学習活動のねらいと内容のまとめ

学習過程	学習活動のねらい	学習活動の内容
① 課題との出会い	生活経験や既習事項と関連付けながら、単元の学習のねらいと課題解決に向けた学習の流れを把握することができるようにする。	単元の学習と社会生活の様々な場面とのつながりを意識し、「何を、どのように学び、何ができるようになるか」、「学びをどのようなことに生かせそうか」ということを考え、学習の見通しをもつ。
② 課題追究	話や文章の内容について、情報を目的に応じて意味付けたり、関係付けたりすることができるようにする。	学習ツールを活用して、情報や思考を可視化・整理し、話し手や筆者の考えを把握する。
③ 考えの形成	「学び合いを支える対話活動」を通して根拠や理由を明確にし、自分の考えを形成することができるようにする。	学習ツールを活用して、情報や思考を操作し、形成した自分の考えを的確に表現する。
④ 共有	「学び合いを支える対話活動」を通して得た助言を基に、自分の考えを再形成することができるようにする。	学習ツールを活用して効果的に助言し合い、自他の考えを広げたり深めたりする。
⑤ 課題解決 (考えの再形成)	単元の学習における課題解決を通して身に付けたことを生徒の言葉で表現させ、学びを自覚し、一般化することができるようにする。	単元の学習を通して、「何を、どのように学び、何ができるようになったか」を振り返り、授業で得た学びを社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを考える。

なお、この学習過程における各学習活動は、領域や単元のねらい、生徒の実態などに応じて適切に活用することにする。

イ 「学び合いを支える対話活動」に有効な学習ツールの研究・開発

「学び合いを支える対話活動」において、考えを形成したり、共有したりするために、情報を整理し、思考を可視化するとともに、的確に表現することが必要であると考えた。

そこで、「情報を整理すること」、「思考を可視化し、自分の考えを的確に表現すること」をねらいとして、先行研究を参考にした思考ツールと、学習活動の目的に応じたワークシートの総称を学習ツールとし、活用することにした。

(7) 情報を整理するための学習ツールの開発・活用

話や文章の構造と内容を把握し、精査・解釈するためには、情報を整理することが必要である。

検証授業Ⅰでは、説明的文章の構造と内容を把握する際、筆者の順序立てた論じ方に着目して読むことができるように、思考ツールの「年表チャート」(図10)を開発・活用した。この「年表チャート」を活用することで、生徒は読み取った内容を時系列に沿って整理し、論じられている内容を順序立てて理解することができる。また、「年表チャート」を活用して、読み取った内容を他者と共有することにも有効である。

今回の検証授業では説明的文章の構造と内容の把握に活用したが、例えば文学的文章を読み、現在の場面と過去(回想)の場面がどのような位置付けになるのかを把握する際にも活用することができる。と考える。

検証授業Ⅱでは、詩に描かれた情景を読み取るための問いを個人で考え、それをグループで共有する際、付箋と共有シート(写真1)を活用した。付箋に書いた問いを関連付けることで、詩に描かれた情景を読み取るための視点を明確にし、課題追究に必要な情報をグループで共有することができた。

(イ) 思考を可視化し、自分の考えを的確に表現するための学習ツールの活用

検証授業Ⅰでは、先行研究を参考に「複数の立場の主張と根拠・理由を可視化すること」を目的として、四つの思考ツール(p.10図11)を活用した。生徒は、「思考を可視化しやすく、他者に説明するときに役立つもの」という視点で四つの思考ツールの中から一つを選び、説得力のある意見文を書くための構想をまとめることができた。

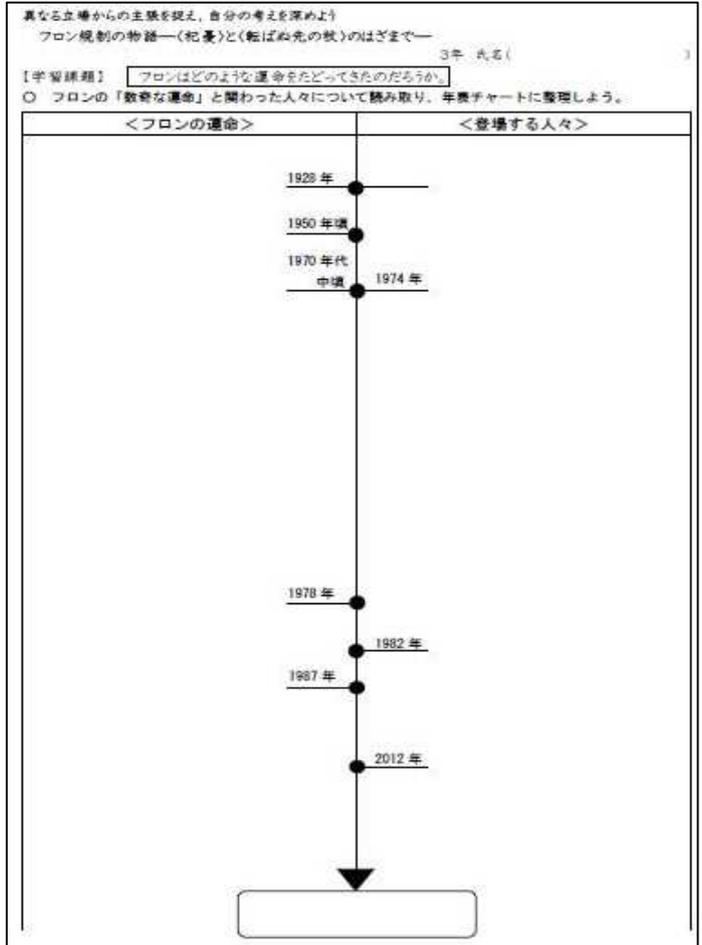


図10 開発した思考ツール「年表チャート」

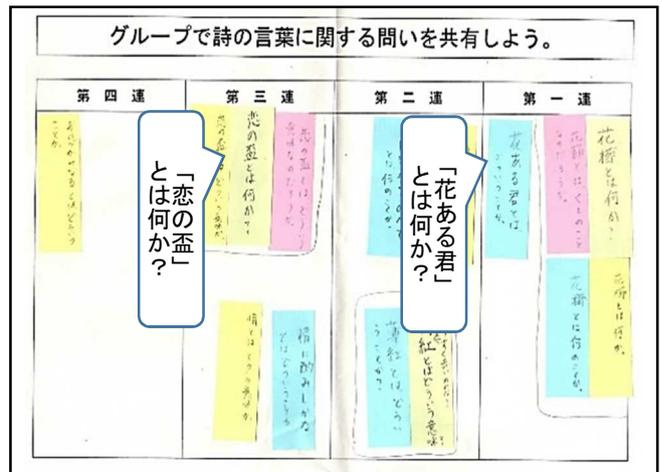


写真1 付箋と共有シート

ウ 「学び合いを支える対話活動」を導く助言の指導

本研究では、「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付けることで、生徒が他者からの助言を通して、自他の考えを明確にするとともに、自分の変容を具体的に認識することができるようにする。

助言について、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編では、「書くこと」の指導事項における「共有」の過程の中で、「助言など」という表現で、表5のように扱われている。

表5 「書くこと」の指導事項における「共有」の系統表

小学校第5学年及び第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
カ 文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。	オ 根拠の明確さなどについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。	オ 表現の工夫とその効果などについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。	オ 論理の展開などについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。

(※ 下線は筆者による。)

「助言など」について、同解説国語編では、「助言などには、助言のほかに、例えば、感想、意見、質問などが考えられる。」と説明されている。この考えを踏まえて、本研究では、「自他の考えを明確にする助けとなる言葉」の総称を助言と捉え、その種類と働きについて、表6のように整理して考えることにした。

表6 助言の種類と働き

助言の種類		助言の働き	助言の具体例
①	感想	聞いたり読んだりしたことについて、思ったことや感じたことを伝える働き。	「この表現がよいね。」 「この表現から、このような気持ちが伝わってくるね。」
②	意見	話し手や書き手の意図や目的を理解した上で、聞いたり読んだりしたことについて、自分が考えたことを伝える働き。	「この表現について、このように考えたよ。」 「あなたの考えについて、このような考えをもったよ。」
③	質問	話し手や書き手の主張の根拠・理由等について、疑問に思ったことや、より詳しく知りたいと感じたことを伝える働き。	「なぜ、このように考えたの。」 「この言葉から、なぜそのように判断したの。」
④	提案	話し手や書き手の意図や目的を理解した上で、より効果的な表現へと向上させるために、自分の考えを伝える働き。	「このように表現すると、もっと分かりやすくなるよ。」 「この言葉からは、このように考えることもできるよ。」
⑤	評価	①～④の助言を他者と交わし合うことで、自分の考えがどのように広がったり深まったりしたのかを振り返り、考えの変容を伝える働き。	「〇〇さんの考えを聞いて、なるほど、こんな考えもあるのだということが分かったよ。」 「私と〇〇さんの考えは、このような共通点・相違点があると分かって、……と考えるようになったよ。」

また、助言し合う活動を行う際、「助言の意図と方法を確認する段階」、「助言し合う段階」、「助言を活用する段階」の三段階を設定することにした(表7)。そうすることで、生徒は助言を通して目指す姿を理解するとともに、見通しをもって助言し合う活動に取り組み、互いの考えを広げ合い、深め合うことができるようになると考えた。

表7 考えを広げ合い、深め合う助言をするための段階の設定

助言し合う活動の三段階		各活動のねらい
①	助言の意図と方法を確認する段階	考えを共有することの意図と方法を明確にする。
②	助言し合う段階	助言を通して目指す姿を理解した上で助言し合う。
③	助言を活用する段階	可視化した助言を基に考えを再形成する。

4 検証授業 I の実際と考察

(1) 検証授業 I の概要

ア 検証授業 I の単元名及び実施学年等

単元名	異なる立場からの主張を捉え、自分の考えを深めよう ー生活の中から見付けたテーマについて説得力のある意見文を書くことを通してー
教材	「フロン規制の物語ー〈杞憂〉と〈転ばぬ先の杖〉のはざまでー」 （『中学生の国語三年』三省堂）
対象	肝付町立内之浦中学校第3学年1学級において実施
実施時期	平成30年7月上旬

イ 単元の特徴

本教材は、化学物質フロンの使用を巡る論争を題材に、様々な立場からの議論や対話、将来を見通す視点の大切さが述べられている論説文である。

地球規模の環境問題は一見生徒にとっては馴染みにくいものであるが、単元の導入（見通し）と終末（振り返り）で「様々な立場からの議論や対話することは社会生活でも必要となってくる」ということを生徒の言葉で実感させれば、課題を主体的に受け止め、未来の社会の担い手として生きていこうとする意欲を育むことができると考えられる。

ウ 単元における評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語についての 知識・理解・技能
他者と積極的に意見を伝え合い、本単元の学習で身に付けたことを他の場面で具体的に生かそうとする。	○ 論理の展開や小見出しの付け方などについて、その意図や効果を捉えている。 ○ 文章に表れているものの見方・考え方を捉え、自分の考えを広げている。	筆者の論理の展開や表現の仕方を活用して、説得力のある意見文を書いている。	熟語や慣用句、ことわざなどを使った効果について考え、語感を磨き語彙を豊かにしている。

エ 評価規準を基にした「判断基準」の作成

評価規準	「フロン規制の物語」に表れているものの見方や考え方を捉え、対話活動によって自分の考えを広げるとともに、筆者の論理の展開や表現の仕方を活用して、生活から見付けたテーマについて説得力のある意見文を書くことができる。	
評価の場面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6時間構成の第4時・第5時で意見文を書く場面。 ・ 6時間構成の第6時で他者と意見文を評価し合う場面。 	
評価の対象	<ul style="list-style-type: none"> ・ 二つの立場の主張と根拠・理由をまとめたワークシート。 ・ 生活から見付けたテーマに対する意見文。 	
判断の要素	「論理の展開」、「表現の仕方」からそれぞれ必要なものを判断して選び、説得力のある意見文を書いていること。（◎が付いているものは必ず使うこと。） (1) 論理の展開 ◎① 導入で問題提起 ◎② 二つの立場の主張・根拠 ◎③ 尾括型 ④ 時系列に沿った述べ方	(2) 表現の仕方 ◎① 読者への呼び掛け ◎② 接続詞 ③ 小見出し ④ 根拠となるデータや図の提示 ◎⑤ ことわざの使用

尺度	判断基準 ※ B (おおむね満足できる状況)	
B	(1) 論理の展開 ① 導入で問題提起し、話題を明確にしている。 ② 話題になっている事柄について、異なる二つの立場の主張と根拠を明確に書いている。 ③ 異なる二つの立場の主張を踏まえて、自分の意見を述べている。 ④ 話題になっている事柄についての経緯を書いている。	(2) 表現の仕方 ① 読者が主体的に考えられるように書いている。 ② 接続詞を適切に使うことで、文と文、文章と文章の関係を明確にして書いている。 ③ 小見出しを使うことで、まとまりごとの内容を簡潔に示している。 ④ 主張の根拠となるデータや読者の理解を補助する図を示している。 ⑤ 語句を工夫して使うことで、異なる二つの立場の考え方を効果的に表している。

【予想される生徒の表現例】

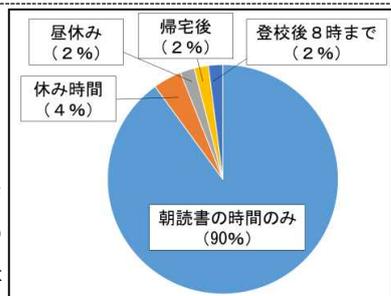
(テーマ例)「朝読書の本は自由図書だけでいいのだろうか。」

(1)①②③, (2)①②④を選んで書き、二つの立場の主張と根拠を述べた後に、一つの立場に立って主張した例。

題名：朝読書を充実させるために

(2)① **皆さんは、朝読書についてどのように感じていますか。** 内之浦中学校では、「読書の習慣を身に付けること」を目的として、朝の会が始まる前の十五分間、好きな本を自由に読んでいます。この、好きな本を自由に読むだけの朝読書は、私たちにとって有意義なものになっているのでしょうか。

「読書の習慣を身に付けること」が目的であれば、好きな本を読むだけでいいのかもしれませんが、三年生を対象にした読書アンケートによると、読書をする時間は朝読書の時間だけだという人が九割という結果が出ました。部活動や塾で忙しく、読書をする時間は学校の朝読書の時間しかないという現状があるのです。アンケートの記述からは、「限られた時間の読書だからこそ、好きな本を自由に読みたい」という意見の人が多く見られました。(1)②



読書をする時間についての回答の結果を示したグラフ(2)④

(2)② **しかし**,好きな本を読むだけでは、内容やジャンルに偏りが出てしまうのではないのでしょうか。本の選び方に偏りがあれば、読書の幅が広がらず、様々な種類の文章を読む力が身に付きません。アンケートの記述にも、「様々なジャンルの本を読むことで、考え方が広がると思う」という意見が多く見られました。(1)②

朝しか読む時間がないからこそ、その短い時間で様々な本に触れて、充実した読書ができるようにするべきではないのでしょうか。例えば、曜日によってジャンルを指定したり、学級文庫の本を読む日を設けたりするなどの工夫をすれば、様々な本に触れるチャンスができます。そのような工夫をすることで、短い時間でも様々な本に触れて、ものの見方や考え方を広げられる、充実した朝読書を目指していくべきだと思います。(1)③

A	<p>(判断基準Bに加えて)</p> <p>(1) 論理の展開</p> <p>① 問題提起に表現の工夫を加え、より効果的な話題の提示をしている。</p> <p>② 異なる二つの立場の関わりを踏まえて、双方の主張とその根拠を書いている。</p> <p>③ 話題になっている事柄を題材にして、今後の社会を生きていく上でどのようなことを大切にしていきたいかを考えて、意見を書いている。</p> <p>④ 歴史的背景を踏まえて、話題になっている事柄についての経緯を書いている。</p>	<p>(判断基準Bに加えて)</p> <p>(2) 表現の仕方</p> <p>① 呼び掛ける語を使って、読者が主体的に考えられるように書いている。</p> <p>② 接続詞を適切に使うことで、説得力のある意見の述べ方について理解を深めている。</p> <p>③ 小見出しがまとまりごとの内容をよりの確に表している。</p> <p>④ 主張の根拠となるデータや図の提示がより適切である。</p> <p>⑤ 異なる二つの立場の考え方を表す語句を使う際、語句と語句との相関性を意識して書いている。</p>
---	---	--

オ 検証授業 I の視点

国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導計画の工夫
(ア) 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための導入（見通し）と終末（振り返り）の工夫
(イ) 連続性のある言語活動の設定
「学び合いを支える対話活動」における指導の在り方の明確化
(ウ) 情報を整理するための学習ツールの開発・活用
(エ) 思考を可視化し、自分の考えを的確に表現するための学習ツールの活用
(オ) 考えを広げ合い、深め合う助言をするための指導の工夫

カ 単元の指導計画（全6時間）

	主な学習活動	活動の手立て
第一次	<p>1 身近な話題について話し合い、問題解決や合意形成についてイメージをもつとともに、本単元の学習と社会生活の様々な場面のつながりを意識する。</p> <p>2 単元の学習課題と言語活動を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>3 全文を読み、学習ツールを活用して読み取った情報を整理し、おおまかな内容を捉える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題について話し合う活動を通して、問題解決や合意形成の困難さとともに、大切さを意識することができるようにする。 既習事項（小論文の学習における文章構成を工夫する力）との連続性を意識することができるようにする。 学習ツールを活用して、文章から読み取った内容を可視化することができるようにする。
第二次	<p>4 学習ツールを活用して情報を整理するとともに、筆者の論理の展開を捉える。</p> <p>5 学習ツールを活用した対話活動を通して、筆者の表現の仕方の工夫とその効果を捉える。</p> <p>6 筆者の論理の展開と表現の仕方を評価し、より説得力をもたせるための工夫を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 既習の説明的文章の構成や論理の展開を振り返ることで、本単元で扱う文章における論理の展開の特徴を判断することができるようにする。 学習ツールを活用し、思考や情報を操作して、「学び合いを支える対話活動」を導くことができるようにする。 より説得力をもたせるために資料を選ぶ学習活動を通して、筆者の論理の展開と表現の仕方を評価することができるようにする。

第三次	7 生活から見付けたテーマについて説得力のある意見文を書くために、選んだ学習ツールを活用して構想メモを書く。	<ul style="list-style-type: none"> 学習ツールを活用することで、主張とその根拠・理由を整理し、説得力のある意見文を書くための情報を可視化することができるようにする。
	テーマ1：「朝読書の本は自由図書だけでいいのだろうか。」 テーマ2：「授業で使う辞典は学校のものだけでいいのだろうか。」 テーマ3：「W杯で決勝リーグに進むために、サッカー日本代表が選択した戦い方は、評価できるものだろうか。」	
	8 生活から見付けたテーマについて説得力のある意見文を書く。	
	9 より説得力のある意見文を書くために、互いに助言する。	<ul style="list-style-type: none"> 助言のポイントを板書で示し、書き手の意図や考えを理解した上で、より説得力のある意見文を書くための助言ができるようにする。
	10 本単元の学習を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考える。	<ul style="list-style-type: none"> 他教科の表現活動や、行事の取組などを提示して、本単元の学習を生かせそうな場面を具体的に考えることができるようにする。

(2) 検証授業 I の指導の工夫と考察

ア 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための導入（見通し）の工夫（1/6）**視点(ア)**

単元の導入（見通し）で、説明的文章を読む学習に関する事前アンケートの結果を示し、実態を把握させた上で本単元の学習を通してどのようなことができるようになりたいかを考え、具体的な個人目標を設定することができた（写真4）。また、本校の生徒にとって身近なロケット打ち上げを話題に話し合う活動を通して、問題解決・合意形成の困難さとともに、大切さを意識することで、本単元の学習を、社会生活の様々な場面でどのように生かせそうか、具体例を挙げながら考えさせ、学習の見通しをもてるようにした（写真5, 6）。



文章を読む文章に表われている筆者のものの見方や考え方をとらえられるようになり、自分の意見をかき立てることができるようにする。

説明文を読んで、他の学習に生かせそうなことを見つける!!

筆者の考えや文章中のエピソードについて知る。

学習していく流れと内容をしっかりとつかみ、自分かき立てる学習目標も立てられてよかった。

最後に書く意見大かき立てておくれよう。

頑張りたいです。

写真4 単元の個人目標

写真5 第1時の振り返り

T ロケット打ち上げをすると、どのようなよいことがありますか。

S1 内之浦にたくさん人が来て、盛り上がる。

S2 特産物が売れて、経済効果がある。

S3 内之浦の魅力を、たくさんの人に知ってもらえる。

T では、ロケット打ち上げをすることで、困ることはありますか。

S4 ある。人がたくさん来るので、交通量が増える。

S5 僕の家がある地域は、打ち上げのときは避難しないといけないから、ちょっと困る。

S6 それから、打ち上げのときは漁に出られない。

T よいことも、困ることもありますね。このように何かをしようとするとき、異なる二つの立場の人たちの気持ちを考えることが、他の場面でもありませんか。

S7 生徒会の話合いで、具体策を絞るとき。

T 決めることが難しいときもありますよね。でも、皆さんの学校生活をよりよくするために、大切な話合いですよね。

写真6 身近な話題について話し合う活動

イ 連続性のある言語活動の設定（1／6）**視点(イ)**

本単元の言語活動を図12のように考えて設定し、単元を構想した。

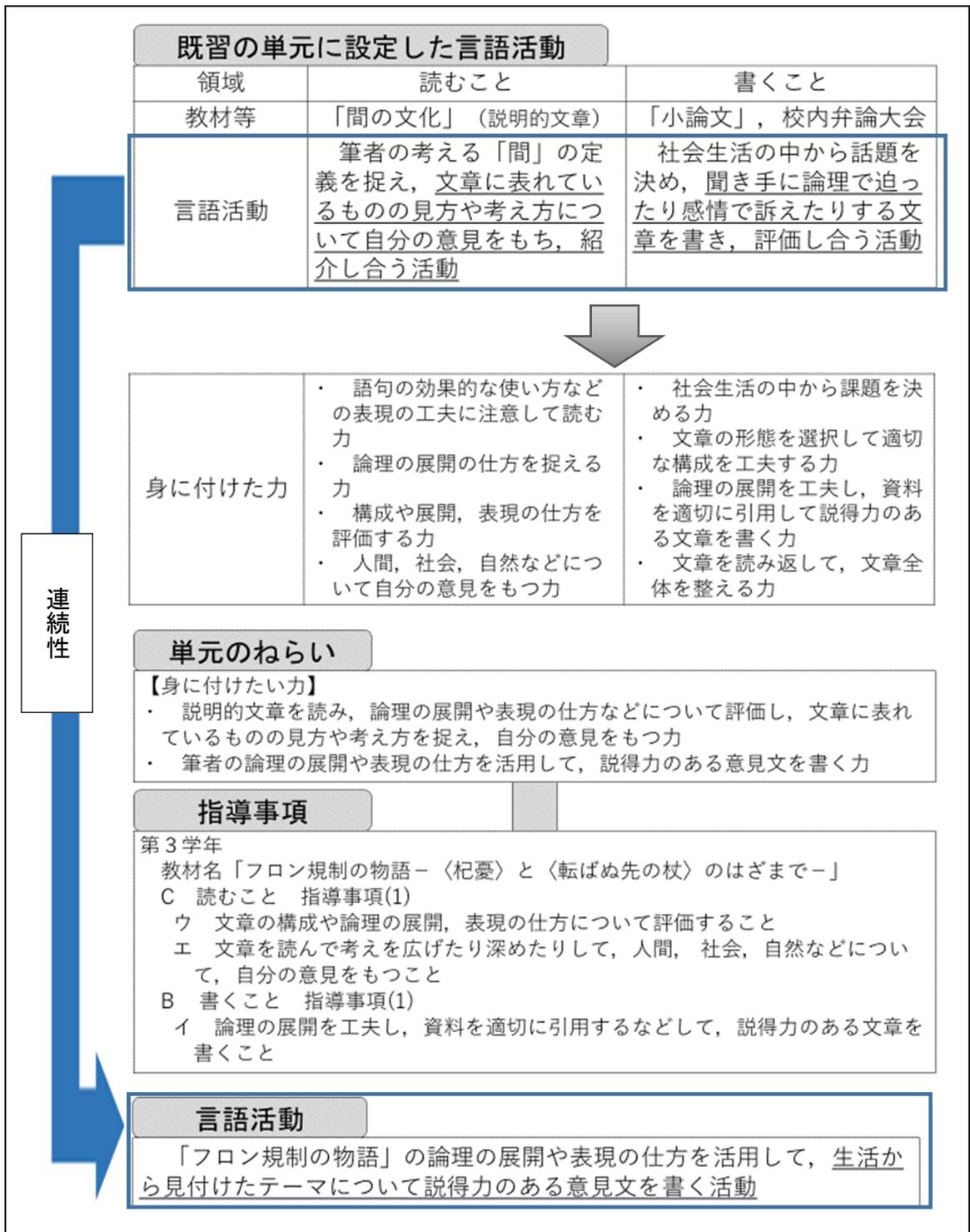


図12 検証授業Iにおける単元の言語活動の設定

連続性のある言語活動を設定することで、生徒は既習事項における成果と課題を具体的に想起し、個人目標を達成するためにどのような言葉の力を身に付ける必要があるのか、自分の言葉で表現することができた。その結果、「前に書いた文章よりも、もっと説得力のある意見文を書けるようになりたい。そのためには、説得力のある論理の展開や、表現の仕方を知る必要がある。」と考えて、説明的文章を読み、目的を明確にした言語活動に取り組むことができた。このことから、生徒は「もっとできそうだ」、「前よりこんなことができるようになりそうだ」、「そのためにこのような学習が必要だ」という学習の見通しをもつことができたと考える。

ウ 情報を整理するための学習ツールの開発・活用（2／6）**視点(ウ)**

文章の構造と内容を把握し、精査・解釈するために、思考ツールの「年表チャート」を活用した。

「年表チャート」を活用して文章を読み進めることで、生徒は筆者が年号を使って出来事の順序を分かりやすく述べていることを理解していた。また、導入で問題提起し、結論を最後に述べる尾括型の構成であることに着目した。その



写真7 「年表チャート」を活用する様子

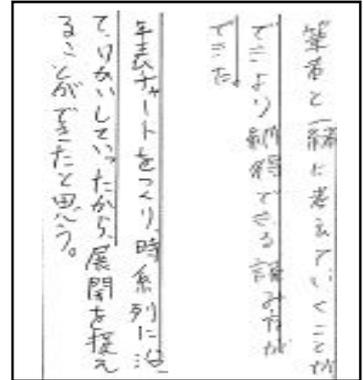


写真8 第2時の振り返り

結果、論理の展開を読者が主体的に読むことができるように、筆者が文章の構成を工夫していることに気付くことができた（写真8）。

エ 思考を可視化し、自分の考えを的確に表現するための学習ツールの活用（3・4／6）**視点(エ)**

複数の立場の主張と根拠・理由を整理し、思考の流れを可視化するための学習ツールとして、今回は四種類の思考ツールの中から、生徒が一つを選んで活用できるようにした。ウェビングマップ、ステップチャート、マトリックスは第2学年までの学習で活用した経験がある。今回新たに加えたバタフライチャートの特徴と活用する方法についての説明をした上で、四種類の思考ツールの活用例を示した。



写真9 ウェビングマップを活用している様子

多くの生徒が自分で選んだ学習ツールを活用して構想を練ることができていた。しかし、学習ツールの特徴と活用する方法を理解してはいたが、使っているうちに「この学習ツールは、自分の思考の流れには合っていなかったかもしれない」と気付いた生徒がいた。このことから、自分の考えを形成するためには、生徒に自分の思考の流れを言語化または簡単に図式化させ、的確に表現するための学習ツールを教師が示すなどの手立てを加える必要があると考えた。



写真10 バタフライチャートを活用している様子

オ 考えを広げ合い、深め合う助言をするための指導の工夫（3～6／6）**視点(オ)**

検証授業Ⅰにおける助言し合う活動の指導を表8に示す流れで行った。助言し合う際、付箋を活用し、助言の内容を可視化・操作化することにした。助言の種類の中でも質問に重点を置き、書き手の目的や考えを引き出すことができたようにした。振り返りの記録から、生徒が他者の助言を基に、考えの再形成に向けて方向性を明確にすることができたと考えられる。

表8 検証授業Ⅰにおける助言し合う活動の指導

①	<p>助言の意図と方法を確認する段階</p> <p>考えを共有することの意図と方法を明確にするために、助言の言葉の例を板書に示し、必要に応じて生徒が確認できるようにした。</p>		
---	---	--	--

②	助言し合う段階	論理の展開と表現の仕方の工夫という観点を明示して、自他の考えを比較することで、助言し合う活動を通して、双方の考えを一層明確にすることができた。		
③	助言を活用する段階	付箋に書いて可視化した助言の中から、自分の考えに説得力をもたせるものを選ぶことで、考えを再形成し、説得力のある意見文を書くことができた。また、「誰の、どのような助言によって、自分の考えがどのように変容したか」を考えて振り返りができるようにした。		

カ 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための終末（振り返り）の工夫（6/6）**視点(7)**

単元の終末（振り返り）で、本単元の学習を社会生活の様々な場面でのどのように生かせるのかを考えた。単元の終末における振り返りの記録（写真11）からは、本単元の学習を、話し合いや作文を書くことに生かせると感じた生徒が多く見られた。また、説明的文章に対する意識の変容について書いた生徒や、本単元の学習を他教科の学習の場面に生かせると思った生徒もいた。生徒のこのような振り返りの様子から、学びを自覚し、一般化する姿を実現することができたと考える。

「話すこと・聞くこと」の学習への活用

みんなが話し合うとき、意見の言い分を習ったので、今回の国語の学習で習ったことも生かすことができると思う。

話し合いや討論などで、自分の意見に説得力を持たせることができて思う。

「書くこと」の学習への活用

これから、夏休みの作文でも描詞語や構成や表現を生かしていい感じに思っている。

夏休みの作文で、説得力のある分りやすい文章を書けそうだと思いました。

「読むこと」の学習に対する意識の変容

この単元の学習をして、難しいと感じていた説明文が少し読まやすくなったと思います。

他教科の学習などの場面への活用

今回で自分で作りのものを見ることにより、たぐやんのことを覚えたので、今後作文作りや他教科で誰かを説得するときにたいとうまくつづけていきたい。

写真11 単元の終末における振り返り

(4) 検証授業Ⅰの成果と課題

ア 成果

- (ア) 単元の導入（見通し）で身近な話題について話し合う活動に取り組むことで、生徒一人一人が、単元における個人目標を明確に設定し、学習の見通しをもつことができた。
- (イ) 「年表チャート」を活用することで、文章から読み取った内容を整理し、文章の構造と内容を把握するとともに、他者と解釈を共有し、「学び合いを支える対話活動」を導くことができた。
- (ウ) 「学び合いを支える対話活動」において、助言を通して目指す姿を明確に示すことで、他者との双方向の助言を通して、生徒に考えの変容を実感させることができた。

イ 課題

- (ア) 異なる二つの立場の主張と根拠・理由を客観的に捉えることが難しい生徒への手立てが不十分であった。
- (イ) 「読めるようになった」と実感させるためには、例えば、「説得力のある意見文を書けたのは、どのような読み方、どのような活動をしたからか。」というように、単元の終末（振り返り）で段階的に振り返る観点を明確に示す必要があった。
- (ウ) 連続性のある言語活動を設定したが、既習事項（小論文の学習における文章構成を工夫する力）の習得が十分でなかったため、単元の終末（振り返り）において、「前よりも、こんなことがもっとできるようになった」という学びの高まり・深まりを十分に感じさせることはできなかった。

(5) 検証授業Ⅰの課題を踏まえた指導法の改善

上記に示した課題を踏まえ、検証授業Ⅱは次の三点に留意して実施したいと考えた。

- 複数の主張と根拠・理由を捉えるために、思考の整理に有効な学習ツールを活用して、よりの確に読むことができるようにする。
- 単元の終末（振り返り）における「学び合いを支える対話活動」を更に工夫し、国語科の学習で身に付けた読み方を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考えることができるようにする。
- 生徒の既習事項の定着状況を把握し、学習の目的に応じた言語活動を設定・工夫することで、生徒が学びの高まり・深まりを十分に感じることができるようになる。

5 検証授業Ⅱの実際と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

ア 検証授業Ⅱの単元名及び実施学年等

単元名	表現の特徴とその効果を理解し、自分の考えを深めよう ー共通する内容をもつ二つの詩を比較して読むことを通してー
教材	「初恋」(『中学生の国語三年』三省堂)
対象	肝付町立内之浦中学校第3学年1学級において実施
実施時期	平成30年12月上旬

イ 単元の特徴

本教材「初恋」は、島崎藤村によって詠まれた文語定型詩である。四連で構成され、「林檎」を用いて恋を表現することで、若者の高まっている初々しい恋心を詠っている。

「初めし」、「さしたる」などの古語や、「花ある君」、「たのしき恋の盃を／君が情に酌みしかな」などの比喻表現が随所に使われており、詩に詠まれた心情を考えることに難しさを感じる生徒も多いと予想できる。しかし、題材として詠まれた初恋ならではのときめきや喜びは、中学生にとって共感しやすい感情であると思われる。そこで、音読・朗読を通して七五調のリズムの心地よさを感じるとともに、作者による言葉の選び方について考えたことを他者と共有することで、詩の魅力である、言葉のもつ解釈の多様性や、磨き抜かれた表現の美しさについて、自分の考えを深めることができると考える。

ウ 単元における評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
他者と積極的に意見を伝え合い、本単元の学習で身に付けた読み方を、他の場面で具体的に生かそうとする。	○ 詩の構成や展開、表現の仕方などについて、その意図や効果を捉えている。 ○ 詩に表れている作者のものの見方や考え方を捉え、自分の考えを広げたり深めたりしている。	詩に使われている言葉の意味や表現の仕方とその効果について考え、語感を磨き語彙を豊かにしている。

エ 評価規準を基にした「判断基準」の作成

評価規準	詩「初恋」に表れている作者のものの見方や考え方を捉え、対話活動によって自分の考えを広げるとともに、共通の内容をもつ他の詩を比較して読むことで、詩の構成や表現の仕方について自分の考えをもつことができる。
評価の場面	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5時間構成の第4時で詩「初恋」と共通の内容をもつ他の詩を比較して読み、分析したことを基に、詩「初恋」のよさや魅力についての自分の考えを紹介する文章を書く場面。 ・ 5時間構成の第5時で、詩の構成や表現の仕方について考えたことを他者と紹介し合い、再形成した自分の考えを書く場面。
評価の対象	<ul style="list-style-type: none"> ・ 詩を比較して読み、分析したことを整理した学習ツール。 ・ 詩の構成や表現の仕方について考えたことをまとめたワークシート。 ・ 詩の構成や表現の仕方について考えたことを他者と紹介し合い、再形成した考えをまとめたワークシート。
判断の要素	<ol style="list-style-type: none"> ① 二つの詩を比較して読み分析したこと（共通点や類似点、相違点） ② 詩に表れている作者のものの見方や考え方 ③ 自分の考え
尺度	判断基準 ※ B（おおむね満足できる状況）
B	<ol style="list-style-type: none"> ① <u>観点を選んで二つの詩を比較して読み、共通点や類似点、相違点を明らかにしている。</u> ② <u>詩の言葉や表現を根拠にして、作者のものの見方や考え方を捉えている。</u> ③ <u>作者のものの見方や考え方を踏まえて、詩「初恋」のよさや魅力についての自分の考えを書いている。</u>

【予想される生徒の表現例】

選んだ観点で二つの詩を比較して読み、島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力についての自分の考えを、例えば次のように紹介している。

選んだ観点：時間の経過

二つの詩「初恋」には、時間の経過を表現しているという共通点があります。しかし、時間の経過とともに、登場人物の関係が深まっているかどうかという点は大きく異なります。①

島崎藤村の詩「初恋」は、「やさしく白き手」、「林檎をわれにあたへしは」、「わがころなきためいきの」、「その髪に毛にかかるとき」などの表現から、連が進むにつれて、「われ」と「君」が直接関わり、距離を縮めていると想像できます。② このように、連が進むにつれて、登場人物の関係が深まっている様子を描き、初恋の喜びを表現しているところが、島崎藤村の詩「初恋」の魅力だと考えました。③

A	<p>(判断基準Bに加えて)</p> <p>① 観点を選んで二つの詩を比較して読み、共通点や類似点、相違点を明らかにすることで、それぞれの詩の特徴を捉えている。</p> <p>② 根拠とした詩の言葉の意味や表現の効果を明らかにして、作者のものの見方や考え方を捉えている。</p> <p>③ 作者のものの見方や考え方について、自分の考えの変容を含めて、詩「初恋」についての考えをより深めて書いている。</p>
---	---

【予想される生徒の表現例】

選んだ観点で二つの詩を比較して読み、島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力についての自分の考えを、例えば次のように紹介している。

選んだ観点：時間の経過

二つの詩「初恋」には、時間の経過を表現しているという共通点があります。しかし、時間の経過とともに登場人物の関係が深まっているかどうかという点は大きく異なり、北原白秋の詩「初恋」からは暗い印象、島崎藤村の詩「初恋」からは明るい印象を受けます。①

島崎藤村の詩「初恋」は、「林檎をわれにあたへしは」、「わがこころなきためいきの」、「その髪の毛にかかるとき」などの表現から、「われ」と「君」が直接関わり、距離を縮めていると想像できます。これらの言葉からは、二人の間に起こった一つ一つの出来事を具体的にイメージすることができます。「君」との関わりを鮮明に描けるほど、二人にはたくさんの思い出があるのでしょう。② 初めて島崎藤村の詩「初恋」を読んだときは、作者が少女に対して愛しいと思う場面を断片的に思い返しているのだと思いました。が、言葉の意味に注意することで、連の内容がつながっているとわかりました。このことから、連が進むにつれて、登場人物の関係が深まっている様子を表しているところが、島崎藤村の詩「初恋」の魅力だと考えました。③

オ 検証授業Ⅱの視点

国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導計画の工夫
(ア) 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための導入（見通し）と終末（振り返り）の工夫
(イ) 連続性のある言語活動の設定
「学び合いを支える対話活動」における指導の在り方の明確化
(ウ) 情報を整理するための学習ツールの活用
(エ) 思考を可視化し、自分の考えを的確に表現するための学習ツールの活用
(オ) 考えを広げ合い、深め合う助言をするための指導の工夫

カ 単元の指導計画（全5時間）

	主な学習活動	活動の手立て
第一 次	1 生活の中にある言葉による表現を想起し、本単元の学習を通して身に付ける言葉の力を明確に意識し、自分の言葉で表現する。	・ 生活の中にある言葉による表現を写真等で示し、それらの表現の効果を考えることを通して、本単元で身に付けたい言葉の力を、生徒自身の言葉で表現できるようにする。
	2 事前アンケートの結果を基に、学級全体で詩を読む学習の実態を把握する。	・ 詩を読む学習に関する事前アンケートを基に既習事項を振り返り、本単元の学習の進め方について見通しをもつことができるようにする。
	3 単元の学習課題と言語活動を確認し、学習の見通しをもつ。	・ 既習事項（和歌を読む学習や校内ビブリオバトルにおける、文章を読んで自分の意見をもつ力）との連続性を意識できるようにする。
	4 詩「初恋」の音読練習を通して、リズムや詩に使われている言葉を確認する。	・ 音読して気付いた詩の特徴をメモしたり、調べたい言葉に印を付けたりして、次時の学習の手掛かりをもつことができるようにする。

第二次	<p>5 辞典や資料を使って詩の言葉の意味を調べ、比喩によって表現されている内容について話し合い、詩の構造と内容を捉える。</p> <p>6 既習事項を活用して、詩の言葉によって象徴されているものを考える。</p> <p>7 観点を選んで島崎藤村の詩「初恋」と北原白秋の詩「初恋」を比較し、共通点や類似点、相違点を明らかにする。</p> <p>8 二つの詩「初恋」を比較して読み、島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力について自分の考えを紹介する文章を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の意味を考える際、問いを作り、詩の内容と構造を捉えるための視点をもつことができるようにする。 第2学年時に文学的文章「小さな手袋」の学習で経験した「象徴の読み方」を活用して、詩の言葉がもつイメージを広げることができるようにする。 学習ツールを活用して他者と交流し、多角的な視点から詩を読むことができるようにする。 学習ツールを活用して、二つの詩の共通点や類似点、相違点を整理し、詩の特徴を捉えることができるようにする。 島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力について紹介する文章を書くことを通して、自分の考えを形成することができるようにする。
第三次	<p>9 島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力について自分の考えを紹介し合い、形成した自分の考えを他者と共有する。</p> <p>10 他者からの助言を基に、自分の考えを再形成し、ワークシートにまとめる。</p> <p>11 本単元の学習を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 助言を通して目指す姿を理解した上で、考えを共有することができるようにする。 交流前の自分の考え、他者の考え、交流後の自分の考えを一枚のワークシートにまとめ、自分の考えの変容を捉えることができるようにする。 本単元の学習でどのような読み方ができるようになったのかを振り返り、学習したことを社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考えることができるようにする。

(2) 検証授業Ⅱの指導の工夫と考察

ア 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための導入（見通し）の工夫（1/5）**視点(ア)**

単元の導入（見通し）において、学校行事で歌った合唱曲の歌詞や、絵本の帯に書かれた言葉を提示し、その表現の効果を考えることを通して、生徒は本単元の学習で身に付けたい言葉の力を具体的に考え、自分の言葉で表現することができた（写真12）。また、詩を読む学習に関する事前アンケートを基に既習事項を振り返り、本単元の学習をどのような方法で進めていくのかを把握し、学習の見通しをもつことができた。

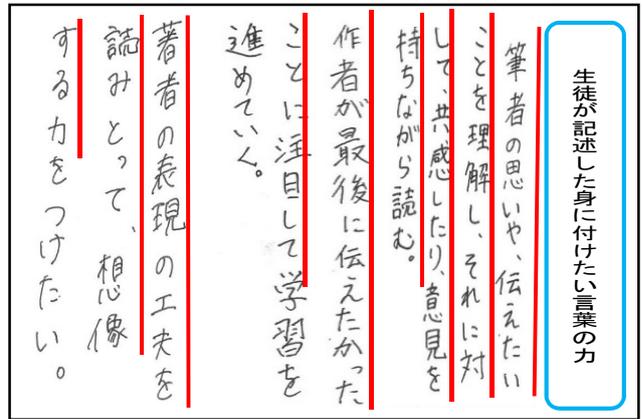


写真12 単元の個人目標

イ 連続性のある言語活動の設定（1・2/5）**視点(イ)**

本単元の言語活動の設定についてはp. 7の図8を参照。振り返りの記録（写真13）からは、生徒が自分の読みの変容に気付いたことが分かる。このことから、連続性のある言語活動の設定が、「前よりこんな読み方ができるようになった」という学びの高まり・深まりを生徒に実感させることにつながったと考えられる。

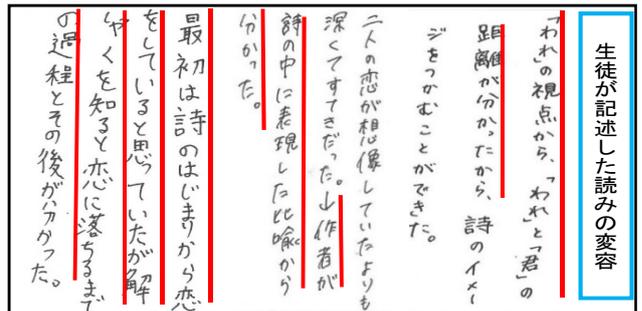


写真13 第2時の振り返り①

ウ 情報を整理するための学習ツールの活用 (2/5) **視点(ウ)**

詩の内容と構造を把握するために、付箋と共有シート (p. 9 **写真1**を参照) を活用して詩の言葉に関する問いを共有し、課題を解決するために必要な情報を整理した。すると、**写真14**のように、詩の内容を理解する姿を見取ることができた。このように、詩から読み取った情報を整理することが、詩の構造と内容の把握につながった。

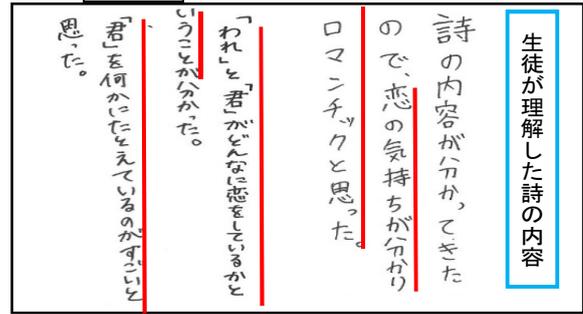


写真14 第2時の振り返り②

エ 思考を可視化し、自分の考えを的確に表現するための学習ツールの活用 (3・4/5) **視点(エ)**

検証授業Ⅱでは、思考を可視化し、的確に表現するために、効果的な学習ツールを示すことにした。第2学年時のノートを活用し、学習ツールの特徴と活用方法を把握させることで、思考ツールのウェビングマップ、ベン図、マトリックスを学習の目的に応じて活用し、思考を可視化するとともに、自分の考えを的確に表現することができた (**写真15**)。

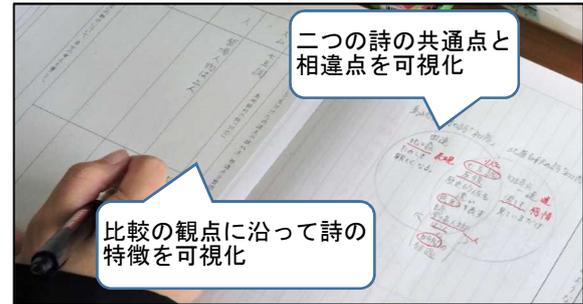


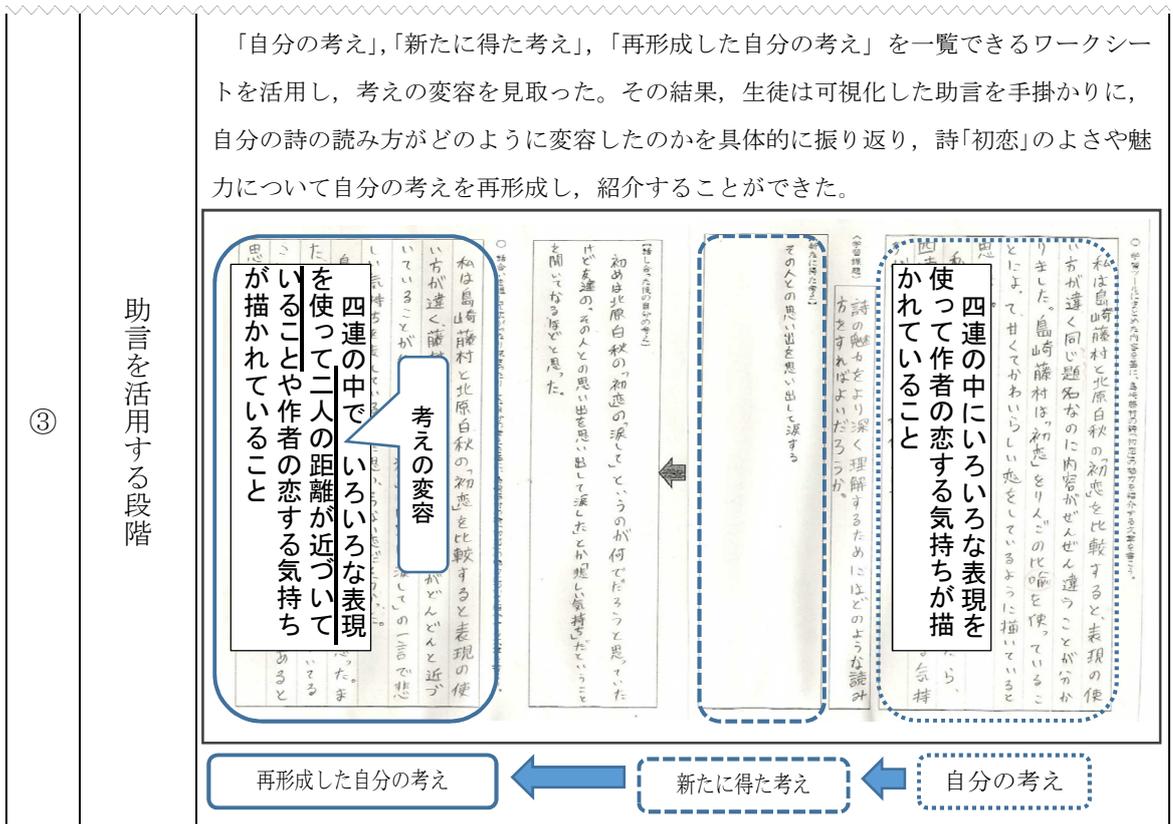
写真15 ベン図とマトリックスを活用している様子

オ 考えを広げ合い、深め合う助言をするための指導の工夫 (3～5/5) **視点(オ)**

検証授業Ⅱにおける助言し合う活動の指導を、**表9**に示す流れで行った。助言を通して目指す姿を明確に示し、考えを広げ合う姿、考えを深め合う姿とはどのような姿であるかを生徒に理解させた上で、助言し合うことができるように、三段階を設定した。検証授業Ⅰでは、助言の内容を付箋に記入して可視化させたが、付箋を渡して交流を終えようとするペア・グループが見受けられた。この反省から、検証授業Ⅱでは助言し合う時間を十分に設け、聞き取った助言を基に広がり、深まった考えをワークシートに記入することで、自分の考えと助言を区別できるようにした。

表9 検証授業Ⅱにおける助言し合う活動の指導

<p>①</p> <p>助言の意図と方法を 確認する段階</p>	<p>助言を通して目指す姿 (考えを広げ合う姿, 考えを深め合う姿) と助言の具体例をスライドで示し、生徒が助言を行う際、必要に応じて活用できるようにした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>交流のポイント</p> <p>1 よいところを認め合う 「ここに注目した、このような読み方がよいね。」</p> <p>2 助言し合う 「詩の言葉から、どうしてそのように考えたの?」「詩のこの表現には、このような効果もあるよ。」「詩のこの言葉からは、このようにも考えられるよ。」</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>考えを深め合う</p> <p>私と○○さんの考えは、□□というところが共通している。△△というそれは、読み方にこのような違いがあるから、だということが分かって……と考えるようになったよ。」</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>考えを広げ合う</p> <p>初めは……と考えていたけれど、○○さんの考えを聞くと、なるほどこんな考えもあるのだということがよく分かって……と考えるようになったよ。」</p> </div> </div> 
<p>②</p> <p>助言し合う段階</p>	<p>学習ツールに記入して可視化した自他の考えを比較し、疑問に思ったことや、詳しく知りたいと感じたことを基に問いを作り、助言し合うことで、考えを広げ合い、深め合うことができるようにした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>



カ 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを意識させるための終末（振り返り）の工夫 **視点(7)**

単元の終末（振り返り）で、本単元の学習を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考えるために、言葉に思いを託して表現する場面の例示や、本校の生徒が書いた作文に感銘を受けて感想を送ってくれた人の話を想起させるなどの工夫をした。振り返りの記録（写真16）からは、言葉の意味や働き、使い方についての自分の考えを形成し、本単元の学習を生かせる場面を具体的に考える生徒の姿を見取ることができた。



図 14 言葉に思いを託して表現する場面の例示（スライド）

読み方についての振り返り

本単元の学習で、一つの観点から考え、どのようなことなのか考えを広げるということをして、他の場面でもこれは生かせられると思った。

言葉への自覚を高めている姿

言葉にはただそのまのまの味があるのではなく人の様々な思いがこめられ、文全体に印象を大きく与えたりする力があることが分かった。またこのように文は身近にあり自分たちも効果的に使っていくにはたくさん人の気持ちを伝えていけると思った。

社会生活の様々な場面への活用

推薦入試の面接や作文三年生を送る会で伝える感謝の気持ちなどに相手にしっかり伝えるために生かされると思う。

写真 16 単元の終末における振り返り

(3) 検証授業Ⅱにおける生徒の表現例

学習過程に位置付けた「学び合いを支える対話活動」を通して、再形成した自分の考えを基に、島崎藤村の詩「初恋」のよさや魅力について、図15のように紹介することができた。

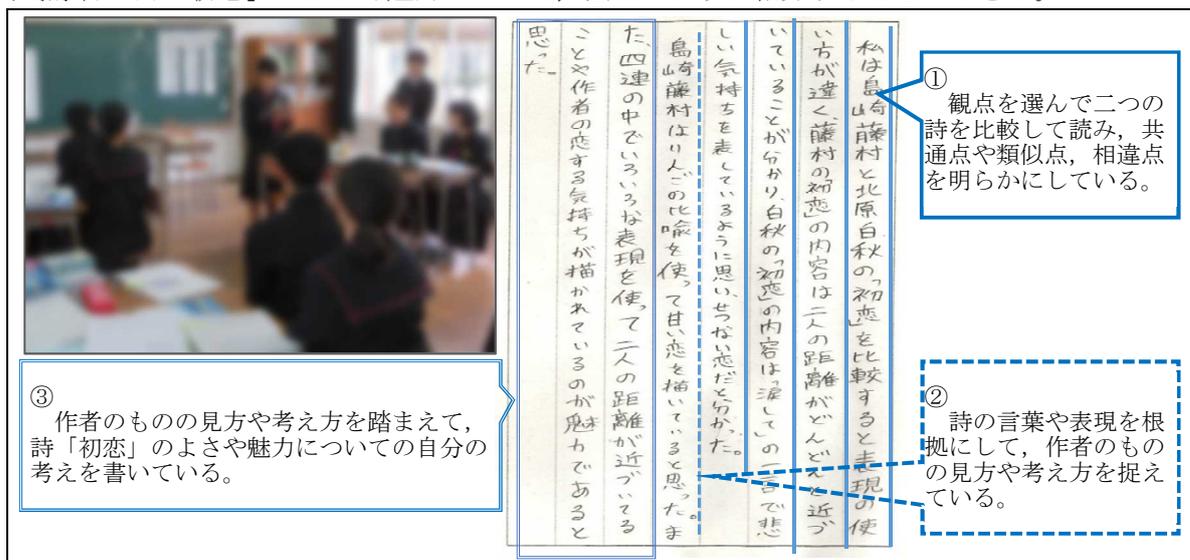


図15 詩「初恋」のよさや魅力について自分の考えを紹介する文章と発表の様子

(4) 検証授業Ⅱの成果と課題

ア 成果

- (ア) 単元の導入（見通し）で言葉による表現とその効果について考えることを通して、単元の学習を通して身に付けたい言葉の力を生徒が自分の言葉で表現し、学習の見通しをもつことができた。
- (イ) 事前アンケートを通して既習事項の定着状況を把握した上で、第2学年時のノートを活用し、思考の整理に有効な学習ツールと、その活用方法を示すことで、生徒はよりの確に読むことができるようになるとともに、単元の言語活動に取り組むことができた。
- (ウ) 「学び合いを支える対話活動」において、助言を通して目指す姿を明確に示すことで、生徒は考えを広げ合い、深め合う助言をすることを通して、自分の考えの変容を捉えることができた。

イ 課題

- (ア) 第2次における詩の内容と構造の把握をする過程で、生徒がより主体的に課題解決に取り組めるような資料の活用方法を工夫する必要があった。例えば、古典を読む際に使う現代語訳や語注のような資料の活用等が考えられる。
- (イ) 終末（振り返り）の場面で、単元の学習を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのかを具体的に考える際、生徒がより主体的に考えることができるような工夫が必要であった。そのためには、社会生活の様々な場面とのつながりを意識することができるような年間指導計画の作成と工夫が必要であると考えられる。

(5) 検証授業Ⅱ後の生徒の意識調査の結果

詩を読む学習に対する意識調査を行うために、検証授業Ⅱの事後アンケートを生徒15人に実施した。その結果、詩を読む学習に関する全ての項目で、授業を受けた生徒全員が「できた」、「どちらかというときできた」と回答している（図16）。このことから、生徒は、詩を読む学習を通して様々な言葉の力が身に付いたという実感をもつことができたと考えられる。

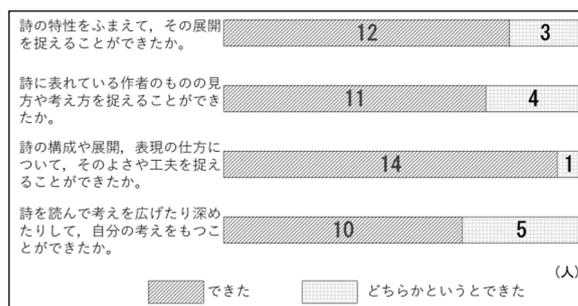


図16 詩を読む学習に対する生徒の意識調査の結果

一方で、「詩を読む学習の後に、学習する前の自分と比べて『できるようになった』と感じることはあったか」という質問に対しては、13人が肯定的な回答をしたものの、2人の生徒が「どちらか」というと当てはまらない」と回答している。また、「詩を読む学習を通して学んだことを『他教科の学習や生活場面で生かせそうだ』と思うか」という質問に対しても、2人の生徒が否定的な回答をしている(図17)。このことから、国語科学習における様々な工夫を通して、言葉の力を身に付けたことを実感させることはできたが、それを社会生活の様々な場面とつなぐ指導を更に工夫する必要がある。

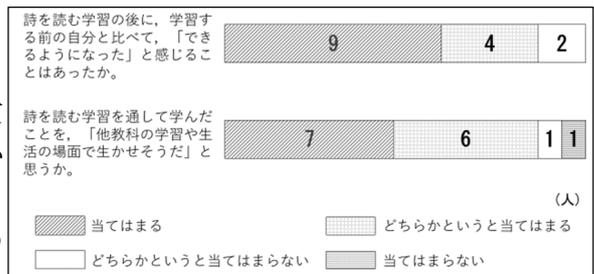


図17 詩を読む学習と社会生活の様々な場面とのつながりに関する生徒の意識調査の結果

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 国語科の学びと社会生活の様々な場面とのつながりを具体的に意識させるための導入(見通し)と終末(振り返り)を工夫することを通して、生徒全員が学習を通して身に付けたい言葉の力を明確に表現することができた。また、連続性のある言語活動を設定することで、「前よりもっとできそうだ」、「前よりこんなことができるようになりそうだ」という学習の見通しをもつことができた。
- (2) 助言の種類とその働きを整理し、考えを広げ合い、深め合う助言をするための三段階を設定するとともに、学習ツールの効果的な活用方法を授業に取り入れることで、「学び合いを支える対話活動」を位置付けた学習過程の工夫と指導の在り方を明確化することができた。

2 今後の課題

- (1) 今回の検証授業は、第3学年の「読むこと」の領域を中心に行ったが、今後は他学年の授業や、他の領域においても、「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付けた国語科学習指導の在り方についても検証したい。そのためには、小学校までの学習も含めた既習事項の定着状況を十分に把握し、学習のねらいに応じた言語活動を適切に設定する必要があると考える。
- (2) 「前よりもっとできるようになった」、「前よりこんなことができるようになった」という学びの高まり・深まりを実感させるためには、終末(振り返り)の指導を更に工夫する必要がある。例えば、詩を読む学習等を通して言葉への自覚が高まってきた終末の段階で、新聞のコラムを読み、筆者の表現の工夫とその効果について考え、話し合う活動を設定するという工夫が考えられる。このような終末(振り返り)における指導の工夫を通して、生徒は単元の学習で読んだ詩や文章に限らず、社会生活の様々な場面で使われている言葉に意識を向け、言葉への自覚を更に高めることができると考える。
- (3) 国語科の単元の学習で身に付けた言葉の力を社会生活の様々な場面でどのように生かせるのか、生徒の言葉で具体的に表現させる必要がある。そのためには、他の単元、他の領域、さらに、他教科等の学習との関連を意識し、実行性のある指導計画の作成が大切であると考える。

〈参考文献〉

- | | | | |
|----------------------------|--|-------|--------------------|
| ○ 黒上晴夫
小島亜華里
泰山裕 著 | 『シンキングツール
—考えることを教えたい—』 | 2012年 | NPO法人学習
創造フォーラム |
| ○ 佐藤佐敏 著 | 『思考力を高める授業 作品を解釈するメ
カニズム』 | 2013年 | 三省堂 |
| ○ 田近洵一
鳴島甫 編著 | 『中学校・高等学校 国語科教育法研究』 | 2013年 | 東洋館出版社 |
| ○ 田村学 著 | 『授業を磨く』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 寺井正憲
伊崎一夫 編著 | 『発問—考える授業, 言語活動の授業におけ
る効果的な発問—』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 藤森裕治
宮島卓朗
八木雄一郎 編著 | 『交流—広げる・深める・高める—』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 藤井千春 著 | 『アクティブ・ラーニング授業実践の原理
迷わないための視点・基盤・環境』 | 2016年 | 明治図書 |
| ○ 澤井陽介 著 | 『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」
の授業改善』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 田村学 編著 | 『カリキュラム・マネジメント入門』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 奈須正裕 著 | 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 松村英治
相馬亨 著 | 『「学びに向かう力」を鍛える学級づくり』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 飯田和明
上谷順三郎
児玉忠 編著 | 『文学—主体的・対話的に読み深める—』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 総則編』 | 2018年 | 東山書房 |
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 国語編』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 国語編』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | 『平成30年度全国学力・学習状況調査結果』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
伊敷中学校 | 『新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付
けた生徒の育成』 | 2017年 | |
| ○ 鹿児島市立
伊敷中学校 | 『「深い学び」への挑戦—授業実践事例集—』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
山下小学校 | 『未来の創り手に求められる資質・能力を育
成する授業づくり—主体的・対話的で深い
学びの実現を通して—』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
田上小学校 | 『共に学び 未来を創るⅡ—学びに向かう
力を育てる指導を通して—』 | 2018年 | |

長期研修者 [上東 唯]

担当所員 [小野 修]

【研究の概要】

本研究は、社会生活につながる学びの実現を目指した国語科学習指導の方向性を明らかにするために、「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付け、国語科の学びと社会生活の様々な場面を具体的につなぐ指導の在り方について研究したものである。

具体的には、まず、国語科の学びと社会生活の様々な場面のつながりを意識させるために、導入（見通し）・終末（振り返り）の工夫を行った。次に、連続性のある言語活動を設定することで、生徒が学びの高まり・深まりを実感できるようにした。さらに、助言し合う活動を重視し、助言の種類とその働きを整理するとともに、学習のねらいに応じた学習ツールの活用を取り入れ、「学び合いを支える対話活動」を位置付けた学習過程における指導の工夫を図った。

その結果、生徒は学習を通して身に付けた言葉の力を明確に認識し、学習したことを社会生活の様々な場面でのように生かせるのかを具体的に考えることができた。このような研究を通して、国語科で育成を目指す、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を身に付ける学習指導の在り方を明確にすることができた。

【担当所員の所見】

本研究は、改訂された新学習指導要領の趣旨を踏まえ、国語科の資質・能力の確かな育成を図るため、社会生活につながる学びの実現を目指したものである。「学び合いを支える対話活動」を学習過程に位置付け、生徒が学びを自覚し、一般化するための指導の工夫が研究の中核にある。

とりわけ、国語科の学びと社会生活の場面をつなぐ指導計画における導入場面と終末場面の改善・充実と連続性のある言語活動の設定は、生徒に国語科の学びの意義や価値を実感させるとともに、「学びの概念化」につながっている。また、「学び合いを支える対話活動」においては、学習過程の各段階で目的に応じて学習ツールを開発・活用したり、意図的・計画的に助言の場面を設けたりすることで、双方向性のある他者との「対話的な学び」を実現している。その結果、これらの国語科の具体的な授業改善の成果が、生徒の意識の変容にもはっきりと表れている。今後は、検証した「読むこと」の領域に加え、他の領域や領域間を有機的につなぐ指導に取り組むなどして、本研究が更に充実・深化・発展することを期待しているところである。

最後に、本研究は、今求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる価値ある研究であり、言葉に対する自覚を高めた生徒一人一人の「国語をもっと学びたい」という声が教室から聞こえてくる貴重な実践である。